

イケメン教師の受難

―伝説の運動会篇―

第五卷 快樂の騎馬戦

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 イケメン教師の白濁の祝砲

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「イケメン教師の受難——伝説の運動会篇——」

第五巻 快樂の騎馬戦」（以下本書と表記する）の著作権は「海老沢薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によつて保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもつて許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第61条などの罰則がありますのでご注意ください。

い。

■ まえがき

二年生によるクラス対抗綱引きで、大勢の生徒や保護者達が見つめる中、教師としてのブランドを粉々に打ち砕かれるほどの屈辱を味わったイケメン教師の三神真琴。

見事綱引き競技で優勝した生徒達に対し、ご褒美として白濁の祝砲を発射させられた真琴は、休む間もなくフラフラになりながら次の競技である三年生男子による騎馬戦に強制参加することになる。

大勢の体操服姿の男子生徒達に混じって一人だけ一糸纏わぬ姿で騎馬隊の正面に立ち、肩の上に男子生徒を乗せながら騎馬戦を戦う事になったイケメン教師は、敵チームの騎馬隊から集中攻撃を受ける羽目になり・・・。

「ああっ、やめてくれ・・・ああっ」

男子生徒達に〇〇を弄られた真琴は大きな喘ぎ声を放ち、発情したオス犬のように激しく悶え狂った。

その姿を見た応援席に座る生徒や保護者達は大熱狂し、校庭で騎馬戦を戦う三年生の男子生徒達は加虐心を煽られ、イケメン教師を徹底的に快感責めにした。やがて、その時は訪れ、イケメン教師はまたしても校庭のど真ん中で教師としてあるまじき前代未聞の醜態をさらし、快感の余韻に浸るのだった。而して、騎馬戦はすっかりイケメン教師の陵辱ショーと化し、三年生の男子生徒達は敵も味方も関係なく、イケメン教師を大勢の前で辱めることを共通の目的とし、その逞しい体を弄び続けた。――あああつ、みんな馬鹿なマネはやめるんだ！――真琴は校庭全体に響き渡る大声で男子生徒達に許しを乞うたが、その声が彼らに届く事は決してなかった。

再び運動会の見世物となった哀れなイケメン教師は、騎馬戦を戦う大勢の男子生徒達の

手によつて底なしの快樂地獄に突き墮とされ
てゆくのだつた。

■ 第一章 イケメン教師の白濁の祝砲

下半身から伝う快感が脳にまで押し寄せ、
真琴はだんだん現実と妄想の区別がつかなく
なりかけていた。ぼんやりとした視界の先に
は大勢の生徒達の姿が浮かび、彼らが好奇と
軽蔑の眼差しを自分に向けているのが分かつ
たが、その情景はすべて仮想現実の出来事の
ように思えた。
自分は今素っ裸で校庭に立ち尽くし、大き
く膨らんだイチモツを手で扱っている。教師
である自分がこんな大勢の生徒達の前でそん
な破廉恥な行為をするはずがない、だからこ
れは全部ただの仮想現実なんだ。真琴は心の
中で自分自身に何度もそう言い聞かせた。
「三神先生、だんだん顔がエロくなってきた
ぞ！」
「先生、早く祝砲を上げてくれよ！」
応援席から聞こえてくる生徒達の声も、真琴
には仮想現実のBGMくらいにしか聞こえな

「先生、もういい加減にしてください！」
応援席に座る生徒達からも次々とヤジが飛び
交い、真琴の意識は一気に現実へと引き戻さ
れることになった。
ああっ、こんな全部夢に決まってい
る・・・。真琴は無謀にももう一度自分自身
にそう言い聞かせ、現実逃避するかのように
イチモツを扱う手に力を込めた。
「やべえ、先生ついに本気のオ○ニーを始め
たぞ！」
「いよいよ変態教師の本領発揮だな（笑）」
応援席に座る生徒達はイケメン教師が発情し
たオス犬と化していく姿に興奮し、嘲笑った。
それから、真琴は次第に下半身を前後に揺
らし始め、射精の瞬間が刻一刻と迫っている
ことを窺わせた。
するとその時、ベテラン男性教師が真琴の
元に近づき、その耳元で何やら囁きかけた。
それを聞いた真琴は再び苦悶の表情を浮かべ、
イチモツを扱う手にさらに力を込めた。

葉は、ベテラン男性教師から耳元で命じられ、
いていた。射精寸前に真琴が放った祝福の言
りと項垂れたまま、響き渡る拍手をじっと聞
るばかりの拍手が送られた。
校庭のど真ん中に立ち尽くす真琴はガック
がり、見事祝砲を上げたイケメン教師に割れ
続けて応援席に座る生徒達からも唸り声が上
クラスの生徒達は感嘆の唸り声を上げて喜び
「オオッー」
だイチモツから白濁の汁を勢い良く発射した
祝福の言葉を叫び、次の瞬間、大きく膨らん
真琴は周りにいるクラスの生徒達に向かって
「みんな、おっ、おめでとう！」
天を仰ぐと大きな叫び声を上げた。
程なくして、ついにその時は訪れ、真琴は
を見逃すまいと目をギラギラと輝かせていた
師の姿を食い入るように見つめ、射精の瞬間
校庭にいる全員が、オ○ニーするイケメン教
れに真琴の周りを取り囲むクラスの生徒達、

たセリフに他ならず、頭の中でどれだけこれ
は全部夢だと言いい聞かせようとしても、全身
に漂う快感の余韻がこれが紛れもない現実で
あることを思い知らせた。
「先生、祝砲上げてくれてありがとな！」
「先生の祝砲は高校生活の思い出として一生
忘れないぜ！」
「この後のクラス対抗リレーでも俺達が優勝
したら、また派手に祝砲を上げてくれよ！」
「俺ら全力で頑張るから頼むぜ！」
真琴のクラスの生徒達はイキ果てた担任教師
の元に集まり、羞恥に震える真琴に向かって
呼び掛けた。
彼らの言葉はまだイケメン教師の羞恥地獄
が終わっていないことを意味し、それを聞いて
た真琴は項垂れたままとても立ち直れそうに
なかった。

■ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説
『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステージ上で罨に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のステージ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅され

た春輝は仕方なく撮影に応じることになり・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をする。とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていく、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 ― 体で償う屈辱のクレーム ― 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。

取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現
れ・・・。
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈
辱的な命令を突き付ける。
社長としてのプライドだけでなく、一人の
人間としての尊厳までも奪われるような命令
に聖哉は憤りを覚えずにはいられたかったが
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地
獄へと堕ちていくのだった。